2009年4月20日(月)読売新聞(夕刊14面)

62歳技術者「関大学長賞」1号

エコ電線開発、国際学会賞

現役の技術者として働きながら昨年、61歳で関西大大学院（大阪府吹田市）で博士号を取得し、環境に優しいエコ電線の開発で国際的な学会賞を受賞した名切卓男さん（62）（兵庫県芦屋市）に、同大学は、模範学生をたたえるため今春創設した「学長表彰」を21日に贈る。初の受賞者となる名切さんは「好きなことを続けて認められたのは、技術者として幸せ」と喜んでいる。

名切さんは、山口県下関市出身。小学生のころから鉱石ラジオを作る理科少年だった。宇部高専で1期生として学び、1967年に関西電力に入社、明石海峡大橋や紀伊水道を横切る海底ケーブルなど、送電線開発を一手に担った。

しかし、電線の樹脂は石油が原料で分解されにくく、処分しやすい素材の開発が課題となっていた。定年が近づき、2004年度からトウモロコシなどの植物を原料にする高分子「ポリ乳酸」を研究する同大工学研究科の田実佳郎教授の下で研究を始めた。

◀ 学生を指導する名切さん（右）（大阪府吹田市の関西大で）

勤務後、片道1時間近くかけて研究室に週4日通い、休日も実験に打ち込んだ。ポリ乳酸は溶かすと、すぐに固まるため、銅線に均等につかず、成功するまで2年以上かかった。

新しい電線は、既製品と変わらない性能があるうえ、自然のなかで分解される。博士論文としてまとめ、08年に電気系の国際学会「IEEE（米国電気電子学会）」から「環境問題に解決策を与えうる」と、最高賞に選ばれた。共同研究者の田実教授は「実用性を重視するプロの視線が生きた」と評価する。

名切さんは、4年前から鋳造炉メーカーで勤務するかたわら週1回、研究室で学生を指導。生涯一技術者の姿勢を貫いている。